

オオヤマザクラ（エゾヤマザクラ）に「サクラ類こぶ病」が蔓延しています。

北海道の気候に適するため、道内に広く植えられているオオヤマザクラ（別名エゾヤマザクラ）で、近年、サクラ類こぶ病という病気に罹っている桜が増加しています。また、病気に罹ったまま放置されている桜が伝染源となって被害が拡大しています。桜の名所を守り育ててゆくため、蔓延してきているサクラ類こぶ病を防除して行きましょう。

1. サクラ類こぶ病の特徴

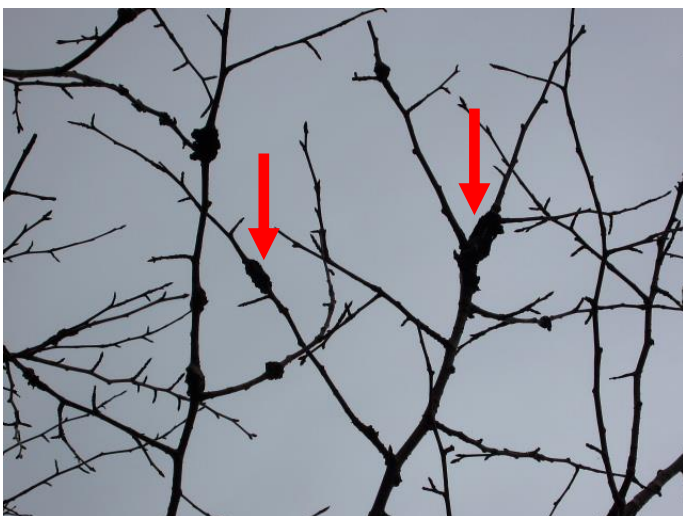
サクラ類こぶ病は細菌の一種（*Pseudomonas* sp.）が病原でおこる伝染病です。この病気は枝や幹に「こぶ状の組織」が形成され、病状が進行すると樹全体にこぶ状組織が増殖します。被害が広がると枝や幹にこぶ状の組織が目につくため花時の見映えが非常に悪くなります。また、こぶ状の組織やこの病気により枯れた部分から太い枝や幹に腐朽が進み、やがて桜は衰弱して枯れてしまいます。サクラ類こぶ病に罹った桜をそのまま放置しておくとも病原菌の密度が高まるため、樹全体に被害が広がるとともに周辺の桜にも伝染してゆきます。このような桜を放置したまま近くに植栽すると苗木でも感染し、被害が拡大、蔓延します。

2. サクラ類こぶ病の防除対策

現在、最も効果的な防除方法は病気に罹った枝や幹を切除して伝染源を無くすことです。切除の時期は病気の枝が見分け易いこと、剪定の適期であることなどから落葉期が適しています。切り口には保護剤を塗布しましょう。見落としやその後の発病などがあるので、2～3年は継続して行う必要があります。なお、こぶ状の組織が多くなってからの対策は樹勢に影響するので、よく観察して早期に切除するようにしましょう。

3. 新規植栽に当たっての留意点

オオヤマザクラは大木となるので植栽間隔が狭いとすぐに成育環境が過密な状態となってしまいます。そうするとサクラ類こぶ病が発生しやすくなるので充分に間隔を空けて植えましょう。また、周辺にこの病気に罹っている桜があると感染しやすいので、防除対策をとりましょう。



サクラ類こぶ病に罹った枝。矢印で示したように病気に罹った部分には、こぶ状の組織がつくられます。